A0028

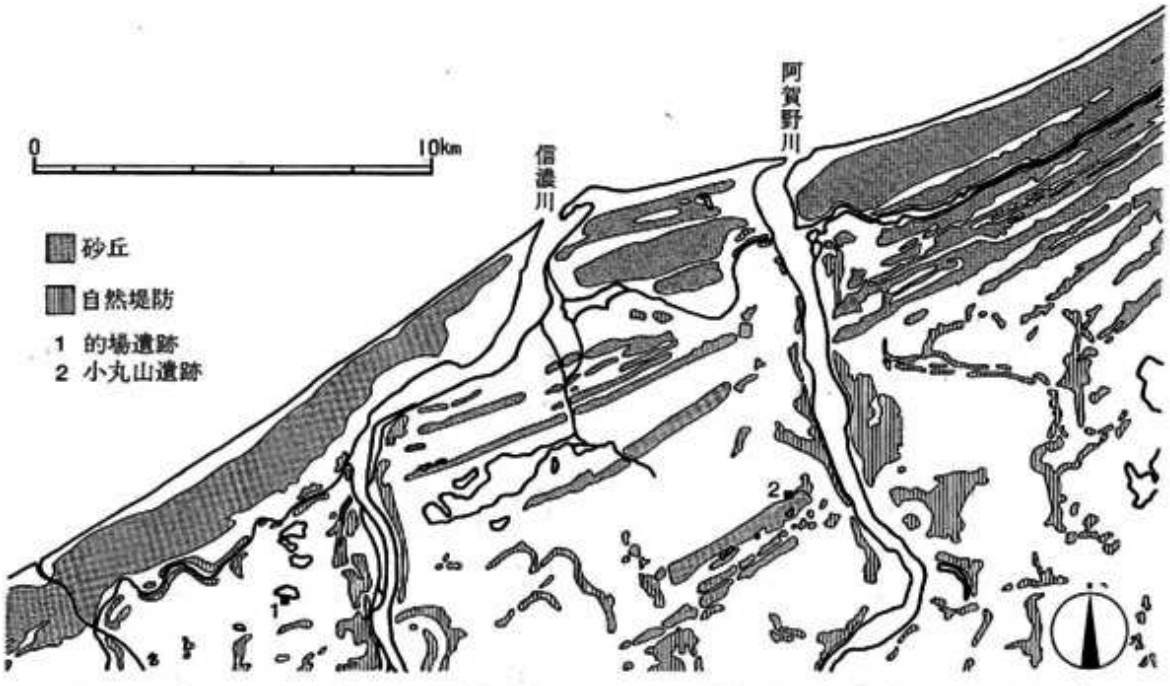
新潟市小丸山遺跡・的場遺跡
範囲等確認調査報告書

1987

新潟市教育委員会

例　　言

1. 本書は1986年に実施した新潟市直り山字小丸山ほかに所在する小丸山（こまるやま）遺跡及び同小新字的場ほかに所在する的場（まとば）遺跡の範囲等確認調査の報告書である。
2. 調査は開発と遺跡保存の協議資料を得るために実施したものであり、小丸山遺跡の開発計画は新潟県住宅供給公社による分譲住宅団地建設、的場遺跡の開発計画は関係地権者で組織予定の土地区画整理組合による土地区画整理である。
3. 調査は、国庫及び県費の補助金交付を受けて、新潟市教育委員会が調査主体となり実施した。調査体制は巻末に記した。
4. 出土遺物は、新潟市教育委員会が一括して保管している。遺物の注記は小丸山遺跡を（KM）、的場遺跡を（MT）としてある。
5. 的場遺跡については、遺跡台帳は「的場館跡」となっていたが、調査で館跡と確認できなかったため名称を改めた。
6. 小丸山遺跡については、調査実施後開発計画に伴う本格調査を実施したため、本書では遺構等に係る資料を総て割愛した。割愛した資料は本格調査で得た資料と一括して別途報告の予定である。
7. 本書の執筆ならびに写真、実測図の作成等は小池・藤塚・渡邊が共同で行い、戸根富美江が補助をした。編集は藤塚が担当した。
8. 方位は真北、レベルは標高を示した。遺物実測図は４分の１にし、土器の断面は土師器を白抜き、須恵器を黒塗り、陶器を網点で示した。拓影図は、断面の右に外面、左に内面を掲げた。遺物の写真番号は実測図と同番号を付した。
9. 調査から本書の作成に至るまで、多くの方々・機関から協力・指導を得た。



第１図　遺跡の位置と周辺の地形概念（新潟古砂丘グループ「新潟砂丘と人類遺跡――新潟砂丘の形成史Ⅰ――」『第四紀研究』13－2 1974年を基に作図）

Ⅰ 小丸山遺跡

1. 遺跡の位置と周辺の環境

位置と地形　遺跡は新砂丘Ⅰに分類[注1]されている、いわゆる亀田砂丘後列の東端部付近の北縁に所在する。現在の海岸線より約9㎞内陸に位置し、南側には旧地形図では標高17.4ｍの最高位（現大江山中学校付近）を持つ亀田砂丘後列（松山――稲葉を結ぶ砂丘）が連なり、北側は約3㎞の低湿帯を隔てて石山砂丘を望む位置にある。また東約1㎞には現在の阿賀野川河道がある（第1図・第2図）。遺跡の所在地は亀田砂丘本列が北西方向に分岐したような形のほぼ先端部にあり、本列とは小さな凹地を隔てている。しかしこの分岐が本列の一部なのか、別砂丘なのかは明らかでない。遺跡の現地表面は1.7ｍ前後と低く、周囲の水田面との比高は2ｍに満たない（第3図）。

周辺の遺跡　亀田砂丘一帯には遺跡が集中的に分布していることが知られている（第2図）。これらのうち3・4・5・41・42番遺跡などは自然堤防上の遺跡であるが、他は大半が砂丘に立地する遺跡である。遺跡の時期は亀田町城山遺跡の縄文前期円筒下層ｄ式と報告[注2]されているものが最も古

1高森(平安)　2阿賀野川中洲(平安・中世)　3大渕(平安・中世)　4西野(平安)　5細山石仏(中世)　6直り山A(平安)　7直り山B(平安)　8小丸山　9松山(中世)　10丸山(平安)　11中山(縄文・古墳・奈良・平安)　12歳岡城山(縄文・平安・中世)　13笹山前(縄文・弥生・奈良・平安)　14笹山神明社裏(平安)　15藤山(平安？・中世)　16茗荷谷(奈良・平安)　17丸山墓所裏(平安)　18小丸山(縄文・平安)　19駒込墓所(平安)　20唇浦郷(平安)　21山ン家(弥生・平安)　22前郷(縄文・弥生・平安？)　23迎山(縄文・平安・中世)　24砂崩(縄文・奈良・平安)　25上ノ山(奈良・平安)　26砂岡(平安)　27彦七山(奈良・平安)　28金塚山(奈良・平安)　29前山(奈良・平安)　30浦ノ山(平安)　31三條岡(奈良・平安)　32向山(縄文？)　33塚ノ山(平安・近世)　34茨島(平安)　35三王山(古墳・平安・中世)　36貝塚(奈良・平安)　37狐山(奈良・平安)　38市助裏(平安・中世)　39川西(平安)　40江尻(平安？)　41山のハサバ(平安)　42小杉(平安？・中世)

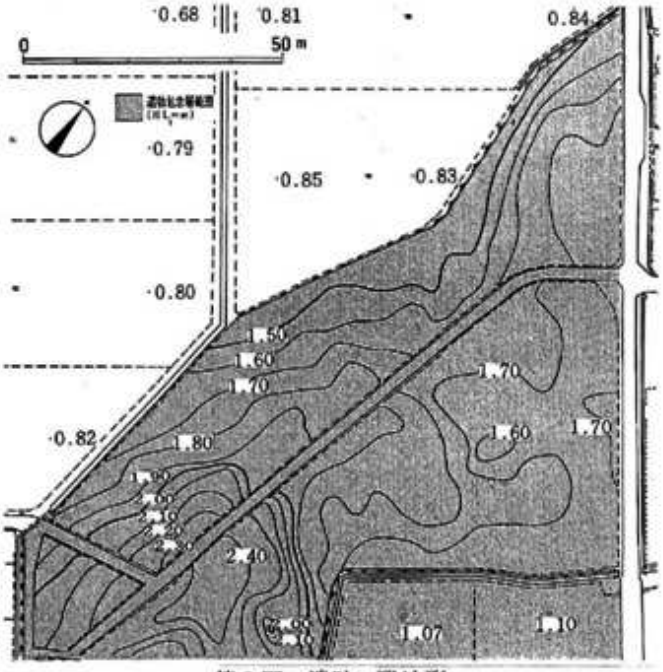
第2図　周辺の遺跡分布

く、それ以降近世までの各時代の遺跡が満遍なく認められる。時代的な分布では縄文・弥生が亀田砂丘前列（11—35番遺跡を結ぶ砂丘）に偏在するのに対し、奈良・平安時代はどの遺跡にも認められるほか、各遺跡の主要時期の過半を占めるなど極めて濃密である。小丸山遺跡も、これら遺跡群とも称される中の一員といえよう。

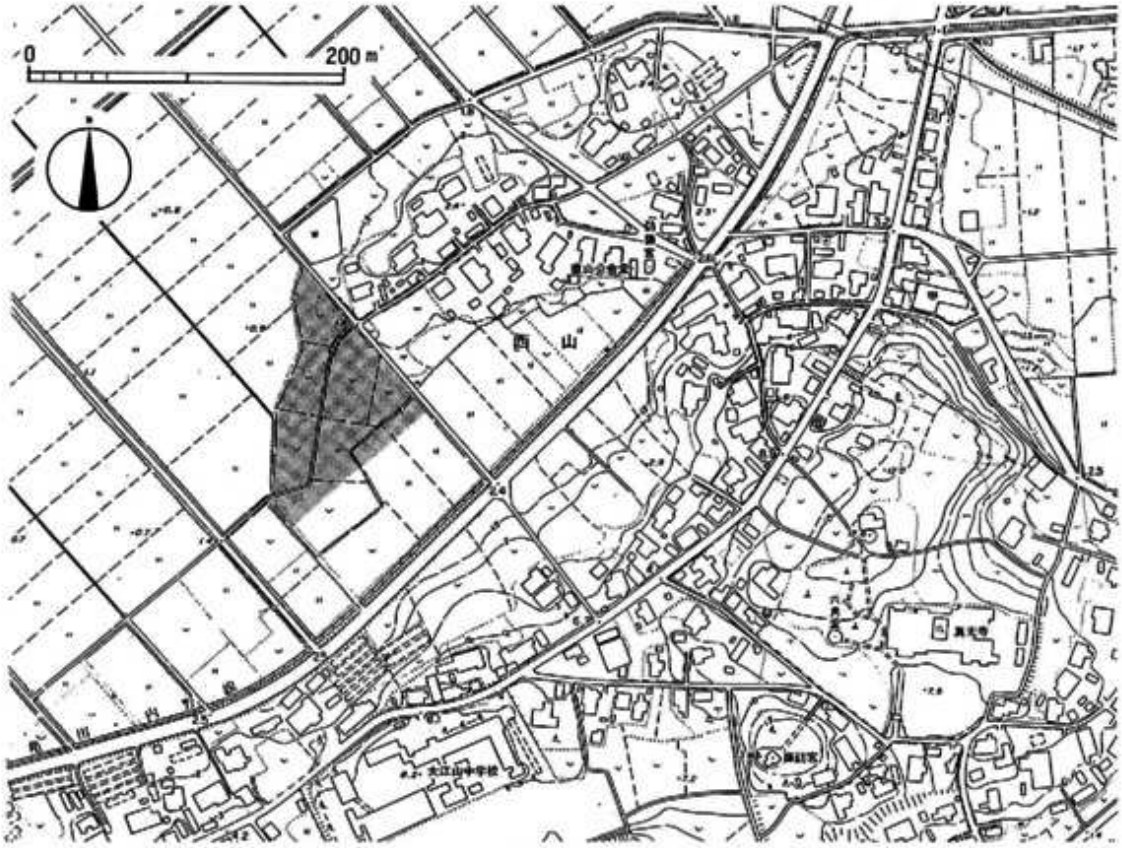
2. 調査の概要

調査区の設定と調査の方法　開発計画は、第5図に示すとおり、直り山集落の西側に舌状に張り出した畑を含むほぼ正方形の区画と道路拡幅部分の約2.1 haである。調査時の遺物散布状態は、畑地に多量に土師器・須恵器が散布していたが、水田での散布は認められなかった。また、計画地内の新規作付は停止されていたが、畑地内には、既設のビニールハウスと収穫前の作物が残されていた。

調査は畑地の現地形測量（第3図）を



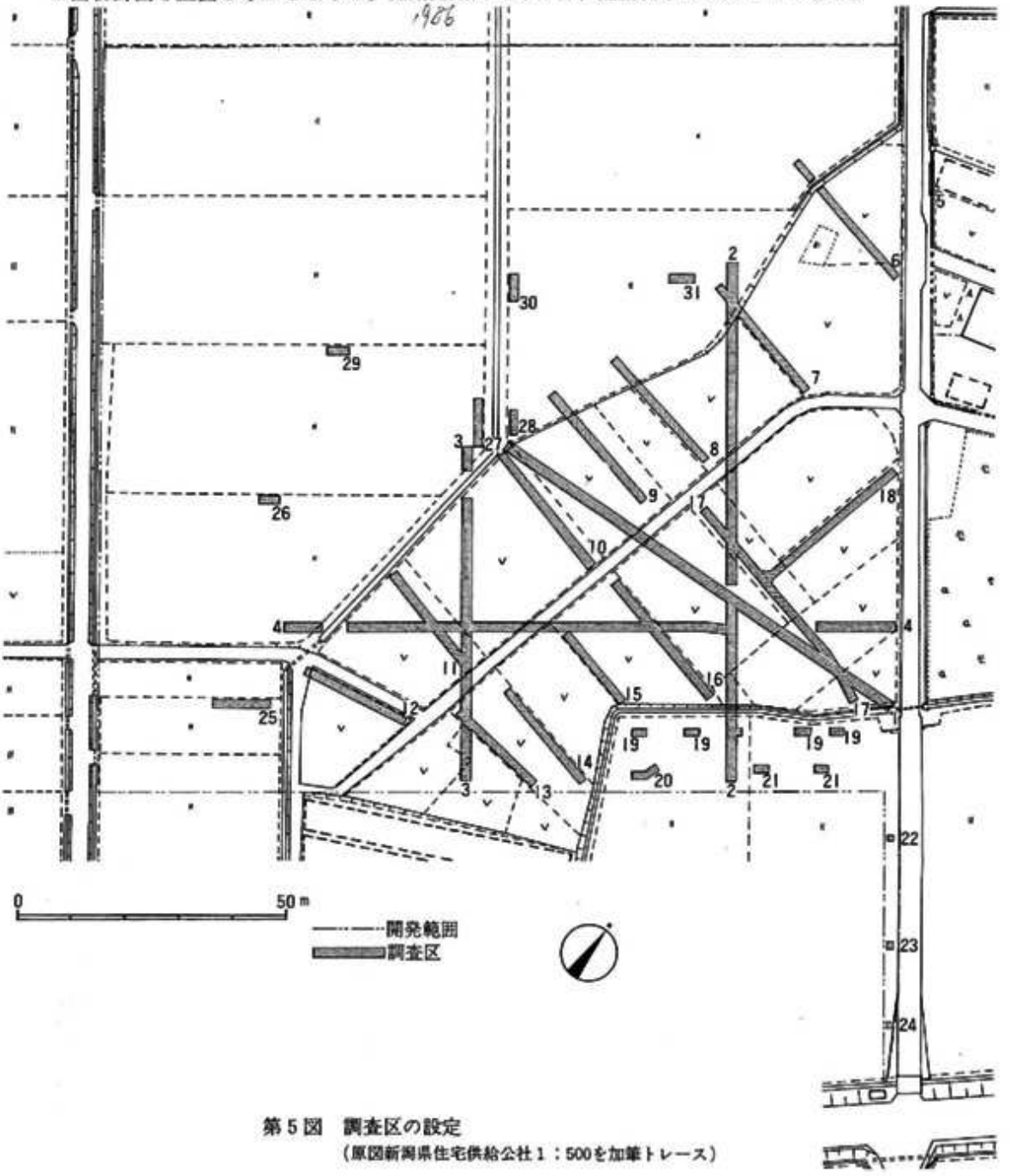
第3図　遺跡の現地形



第4図　遺跡周辺の地形

行った後、まず作付等に影響しない部分を選び、畑地を横断する形で第６～第18トレンチを設定し調査を開始した。次に作物等が取り除かれた時点で仮水路設置計画位置に第１トレンチ、開発地を直行する第３～第４トレンチを設定した。この間水田部分で第19～31の小トレンチを順次調査した。第５トレンチは排水路整備工事に係わる立合い調査区である。

調査は当初トレンチ内の砂層到達面までを重機で除去した後、遺構等の検出にあたったが、砂層上部に堆積する粘土質層に多量に遺物が包含されていることが確認されたため、調査途上で、重機による除去を粘土直上までに留め、以下の層は人力による掘り下げに切り変えた。結果として調査は当初計画を上回るものとなった。発掘開始は６月９日、発掘終了は８月２日である。

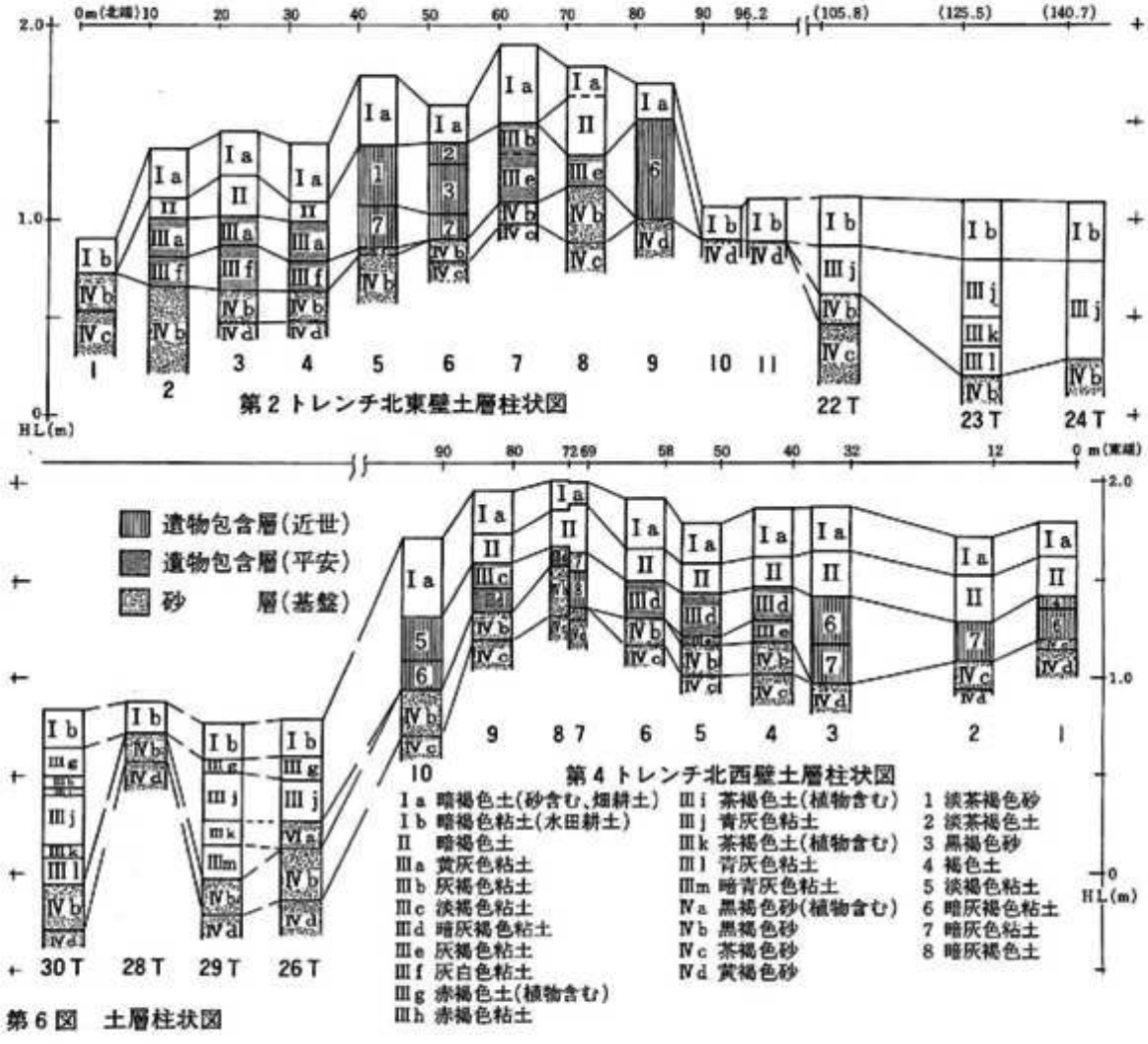


第５図　調査区の設定
（原図新潟県住宅供給公社１：500を加筆トレース）

層序　第６図に基本層序を示す。基本層序はⅠ層表土層、Ⅱ層暗褐色土層、Ⅲ層粘土層（遺物包含層）、Ⅳ層が基盤の砂層である。Ⅲ層は当初畑地に伴なう客土層の疑いがあったが、遺物包含の状態及び水田部に同層比定層の広がりが認められることから、自然層であり、本遺跡の生活面と考えられる。Ⅳ層はⅢ層との境界部に一部遺物が認められるが基本的には無遺物層である。

Ⅳ層は水田の各トレンチにも認められ、遺跡は幅広い砂丘の尾根を基盤にしていることが知られる。しかし、この尾根も急激な傾斜を持たないため、第19～21トレンチでは、水田耕土直下がいわゆる白砂層となり、黒砂層（Ⅳｂ）・Ⅲ層を削平して開田したことを示している。他の水田部では、このゆるやかな傾斜を持つⅣ層上のⅢ層中に数枚の腐植質層を認めることから、この遺跡が営まれた頃の周囲は湿地状態であったと思われる。なお、Ⅲ層は場所により色調が異なり、統一が困難である。

遺跡の範囲　調査でⅢ層中に遺物包含が認められたトレンチは、畑地内の各トレンチ総てであるが、遺物量は畑地東半に偏在する。また、第19トレンチは包含層を削平されているものの、遺構がなお残存していた。第20トレンチ以降の各トレンチでは、遺物を出土しない。したがって、開発計画地内の遺物包含層の広がりは、畑地全域及び第19トレンチ周辺の約8,700㎡と推定される。また、このうち畑地中央の道路から東側の第１・第４トレンチ交差地付近を中心とする約3,500㎡は、遺



第６図　土層柱状図

構・遺物量とも多く調査区域内での遺跡中心部と認められる。

3. 出土遺物（第7図・第8図、図版2）

出土の状態　各トレンチとも遺物の大半はⅢ層の粘土層内より出土したため、取り上げに苦労した。加えて同層の色調等が一様でないため、同層中の遺構確認は困難であり、Ⅳ層到達時にプランが確認された。また同層中に近世以降の遺構が存在するが、これは同期遺物の混入が目安になり識別された。前述のように畑地西側の遺物は少なく細片が主体であるが、第10トレンチ東端付近の平安期土坑確認面の遺物や第2トレンチの横瓶がある。畑地東側では、第18トレンチ東端付近で近世末期以降の土坑、第19トレンチで平安期の土坑、井戸などが確認された。第1・第2・第4トレンチでは粘土層中に遺物集中地点がいくつか確認されたが、これらには平安期の溝状遺構に伴うものがあった。また、各トレンチともピットがかなり認められた。なお、第6～第8トレンチの水田と畑地境界部では丸木による杭群が検出された。用材は第18トレンチ土坑のものと同じ状態であり、近世末期以降の所産と思われる。出土遺物量はコンテナ約10箱で、大半は平安期のものである。平安期の遺物では杯類が多く、大半の底面は須恵器が回転ヘラ切り、土師器が回転糸切りで、ロクロ成形される。近世のものを除けば、概ね9～10世紀の比較的短期のものと思われる。(注3)

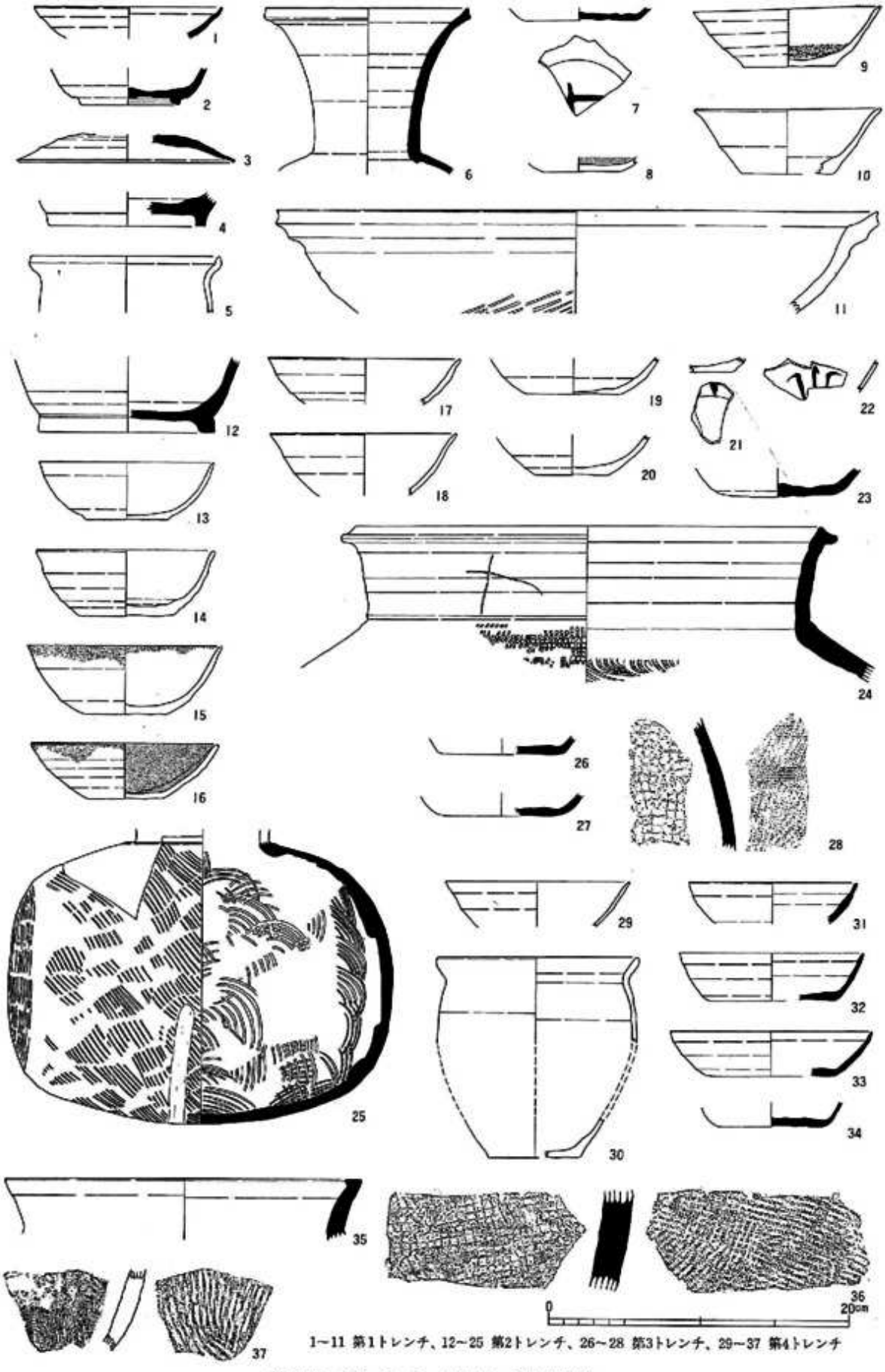
以下に遺構に伴わない遺物を抽出して記す。

第1トレンチ（第7図1～11）　1～5は東端から11mの遺物集中地点より出土した。1は杯、2は有台杯である。3は杯蓋であるが、内面が滑らかで墨が薄く残っており、転用硯と思われる。4は壺底部、5は甕。6～11は包含層出土。6は口径13.7cmを測る長頸壺である。7の無台杯は底面に墨書があるが、破片のため判読できない。8は黒色土師器の杯。9・10は杯で、9の内面下半には幅約2cmの円形状に煤状付着物が認められる。11は鍋。外面下半は平行叩き目である。

第2トレンチ（第7図12～25）　12～22は南端から20～27mの遺物集中地点より出土した。土器の細片とともに、多量の炭化物が含まれていた。器形の復元できるものはわずかであるが、土師器杯が多く、底部からは約80個体を数える。12は壺底部。13～22は杯で、底面の糸切りはほとんどがロクロ右回転である。15の口縁内外面には煤が付着している。16の内面には漆と思われる内容物が厚く張り付き、外面には煤が付く。21・22は胴部に墨書があるが、いずれも判読できない。22は口縁を下側にして文字を書いている。23の無台杯、24の甕は包含層出土。24は口径31.2cmを測る大形のもので、胴部外面は格子叩き目、内面は同心円文のあて具痕である。ロクロナデされる頸部に、細い「＋」字状の刻線がある。25は横瓶。南端から68.8mの地点で壺破片1点と共に出土した。頸部より上を欠損。内面は同心円文のあて具痕、外面は平行叩き目であり、右側面がロクロナデの後カキ目調整されるのに対し、左側面はロクロナデが粗く、平行叩き目が残る。

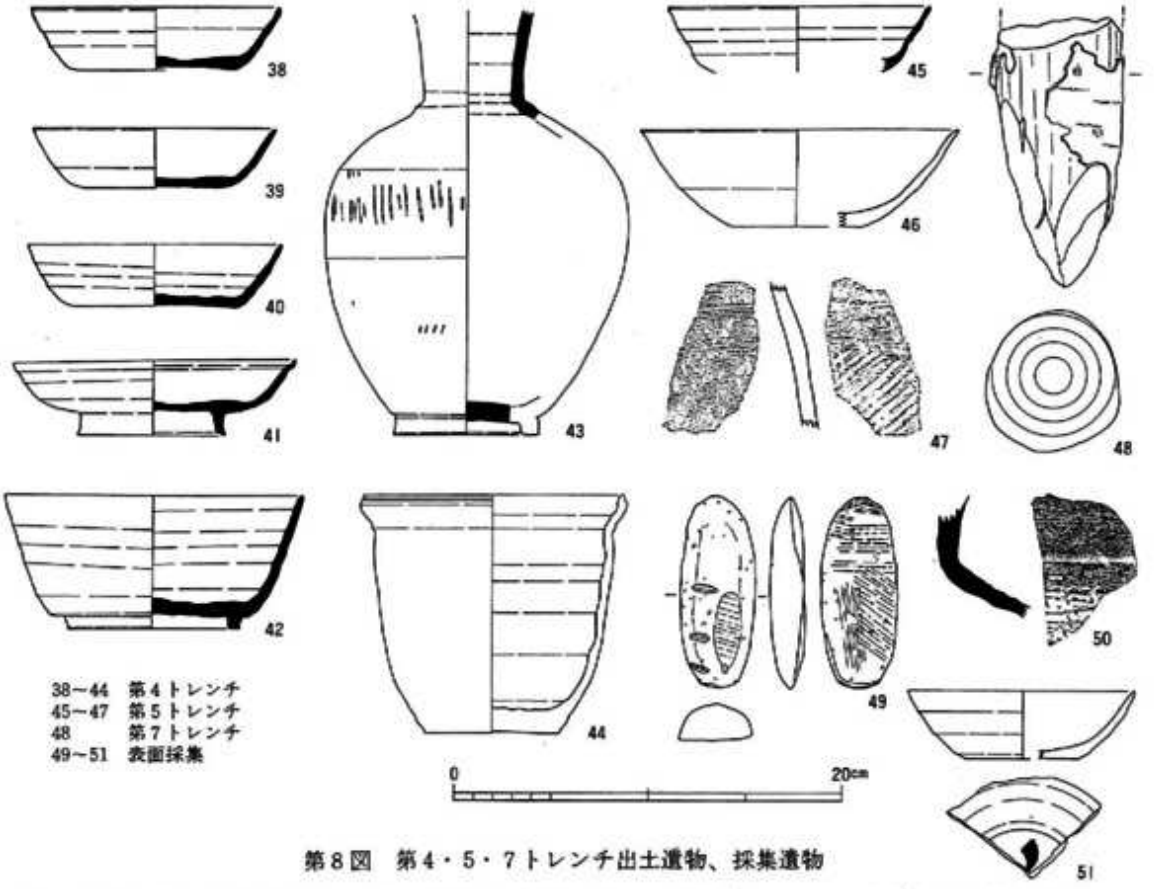
第3トレンチ（第7図26～28）　遺物は少量である。26・27は無台杯底、28は甕胴部。

第4トレンチ（第7図・第8図29～44）　29の杯、30の甕は東端から32mの遺物集中地点より出土。31～36は東端から59mの遺物集中地点より出土。31～34は無台杯。35は短頸壺の口縁部と思われる。端部が内側につまみ出される器形で、外面に自然釉がかかる。36は外面平行、内面格子叩き目の大形甕胴部破片。土師器は少量で細片のみである。37は外面平行叩き目、内面ハケメ調整の甕破片。38～42は東端から48mの地点で一括出土した。41の有台杯は、口縁部が内湾気味に「く」の字に開く。



1～11 第1トレンチ、12～25 第2トレンチ、26～28 第3トレンチ、29～37 第4トレンチ

第7図　第1・2・3・4トレンチ出土遺物



第8図　第4・5・7トレンチ出土遺物、採集遺物

砂・小石の多い粗悪な胎土で、他の須恵器の杯類に比べて異質である。42の有台杯は灰色を呈し、均整のとれた丁寧な作りである。43の長頸壺、44の甕は、西端から13.5mの地点で一括出土した。43は口縁のみ欠損、胴部には平行叩き目がわずかに残る。44の外面全体には煤が付着し、二次焼成による剝落が著しい。

第5トレンチ（第8図45～47）　遺物は少量である。46の杯は内外、底面とも丁寧に磨かれている。

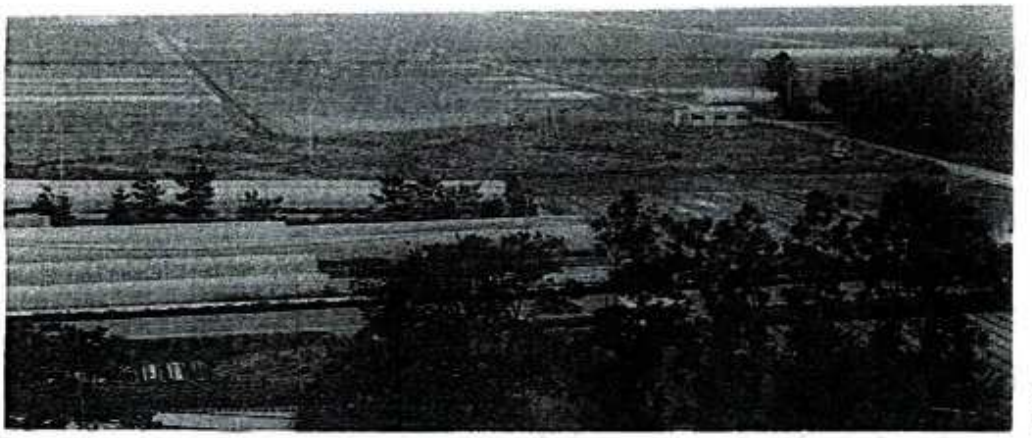
第7トレンチ（第8図48）　近世の杭群のうちの一本である。樹皮が残存する。

採集遺物（第8図49～51）　いずれも調査区域の東に接する豊島正次郎氏宅竹藪から採集された。49の砥石は礫の剝離面をそのまま使用している。50は甕肩部。51の杯は底面に墨書がある。

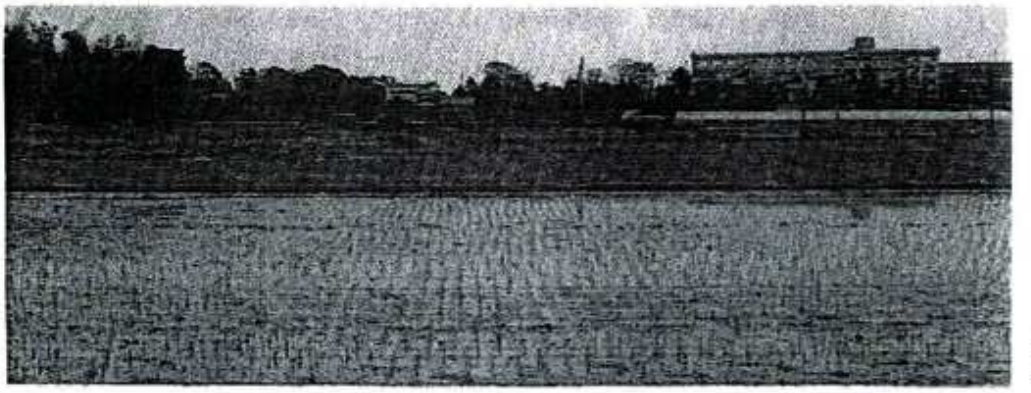
4. ま と め

各トレンチでの所見によれば、近世末期以降の人為的な改変を部分的に認めるものの、大規模な破壊を受けた形跡はなく、調査区域内の遺跡保存状態は良好である。井戸跡や柱穴などの遺構は、出土遺物と合せて、本遺跡が平安時代の集落であることを示している。調査区域南東の隣接地からは、本遺跡と同期の遺物が発見されており、また直り山B遺跡とも至近距離にあることから、調査対象地は直り山集落をほぼ包括する遺跡の南半部に相当するものと思われる。

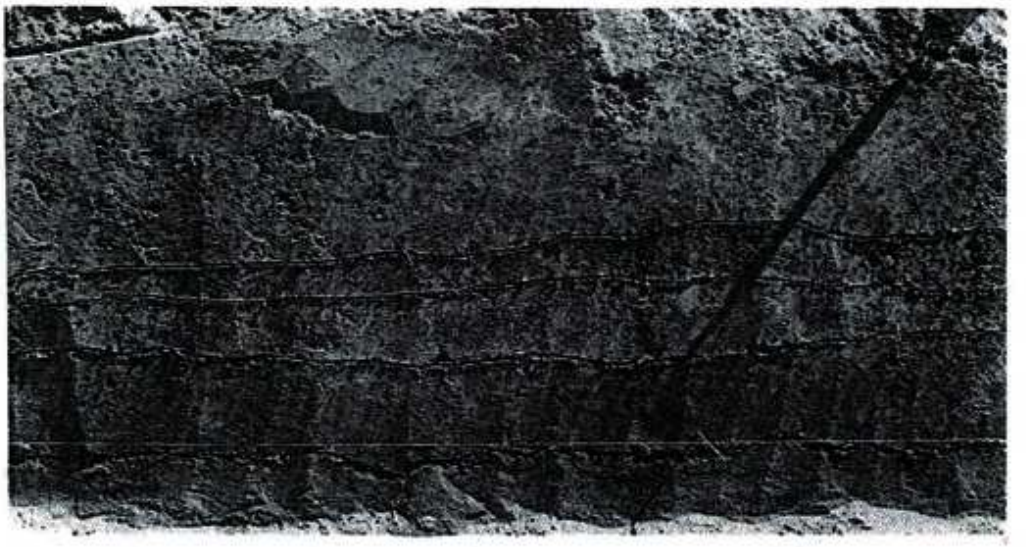
前述のように、本遺跡の周辺は奈良・平安時代の遺跡が極めて多いが、この遺跡群の性格は明らかでない。砂丘後列の遺跡は、過去の砂取りによって大半が大規模に改変されており、僅かに緊急調査を実施して、銙帯（丸鞆1点）を出土した茗荷谷遺跡があるだけである。本遺跡が上記のように遺跡の全容を残しているとすれば、この遺跡群の中においてもまた、誠に貴重な遺跡といえよう。



遺跡遠景（南から）
1986年６月

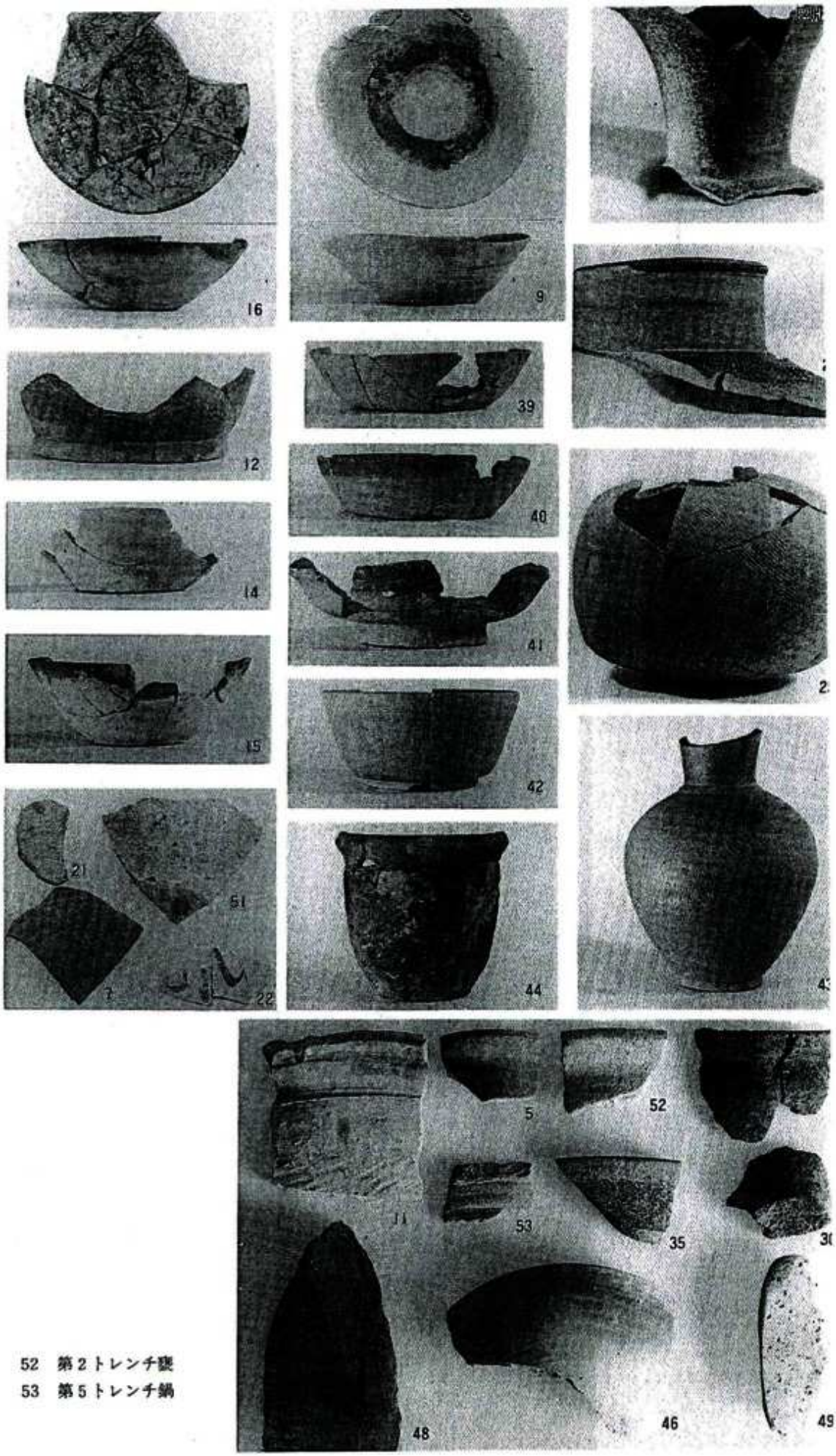


遺跡近景（北から）
1986年６月



基本層序１
（第１トレンチ畑）

基本層序２
（第31トレンチ水田）



52　第2トレンチ甕
53　第5トレンチ鍋

Ⅱ 的場遺跡

1. 遺跡の位置と周辺の環境

位置と地形　遺跡は現海岸線より内陸約4㎞の沖積地の中に所在する。周辺は信濃川等の河川が海岸砂丘に遮られ、河道を大きく変える付近で、近年までラグーンが点在した極めて低湿な地域である（第1図）。遺跡は現在新潟市流通センターに接しているが、同センターもまたこれらラグーンのひとつである的場潟を埋め立てて造成された。周囲は今もヤチが広がる原野となっているが、遺跡の中心部はこの中にあって標高約1.2mと周囲の比高約3mを持って突出した砂地となっている（第10図・第11図）。地元でいう的場山である。砂地については、西約2㎞の緒立遺跡でも認められ、そこでは新砂丘Ⅰないし Ⅱの砂丘列の可能性が指摘[注4]されており、本遺跡もこれに類するものであろう。なお、的場山には稲荷神社があり、石祠が東向きに据えられている（図版5）。明治16年の神社明細帳には享保10年（1725）創立、本社石祠間口壱尺二寸奥行壱尺とあり、台座の大きさはこれにほぼ符合する（図版5）。

周辺の遺跡　第9図に示すとおり緒立を中心に遺跡は分布している。この中で最も古い時代からの遺跡は緒立B遺跡で、縄文晩期の配石が知られている[注5]。同遺跡は弥生・古墳・奈良・平安時代と各時期を持つ遺跡で、古墳以降には緒立C遺跡がこれに加わっている。またこの両遺跡の間に位置する緒立八幡神社には、日本海側最北の古墳[注6]がある。中世の遺跡では緒立館跡が所在している。緒立周辺は黒鳥伝説[注7]の主要舞台であり、的場山を含めた戦いの伝承が伝わっている。これを実証する資料は不明確であるが、縄文から中世に至るまで緒立は重要な位置を占めており的場遺跡もまたこれと無関係ではなかったと思われる。

2. 調査の概要

従前の調査　本遺跡は1970年、当時の黒埼村教育委員会によって発掘調査されている。この調査は第11図で示す1辺50m程度の台形状の突出部内にほぼ限定された範囲での発掘であるが、同調査により以下のことなどが明らかにされた[注8]。1．古式土師器の時代と平安時代中後期の時代の複合遺跡である。2．遺跡中心部の高まりには粘土が貼られており、さらに周囲のヤチには東西約150m、

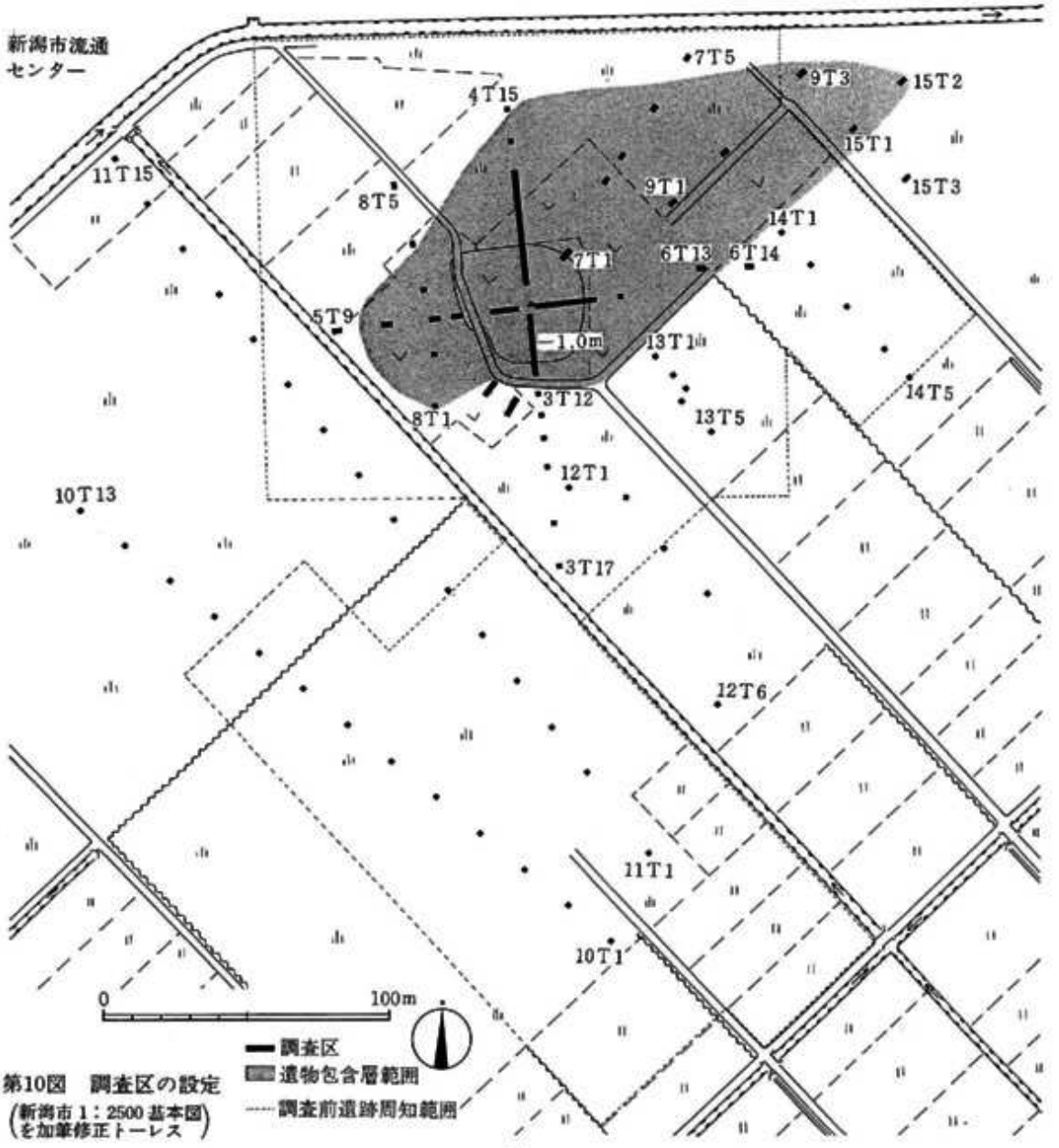
1 的場遺跡
2 緒立C遺跡（古墳・平安・中世）
3 緒立八幡社古墳（円墳1基）
4 緒立B遺跡
（縄文晩・弥生前中後・古墳・奈良・平安）
5 緒立館跡（中世）

第9図　周辺の遺跡分布

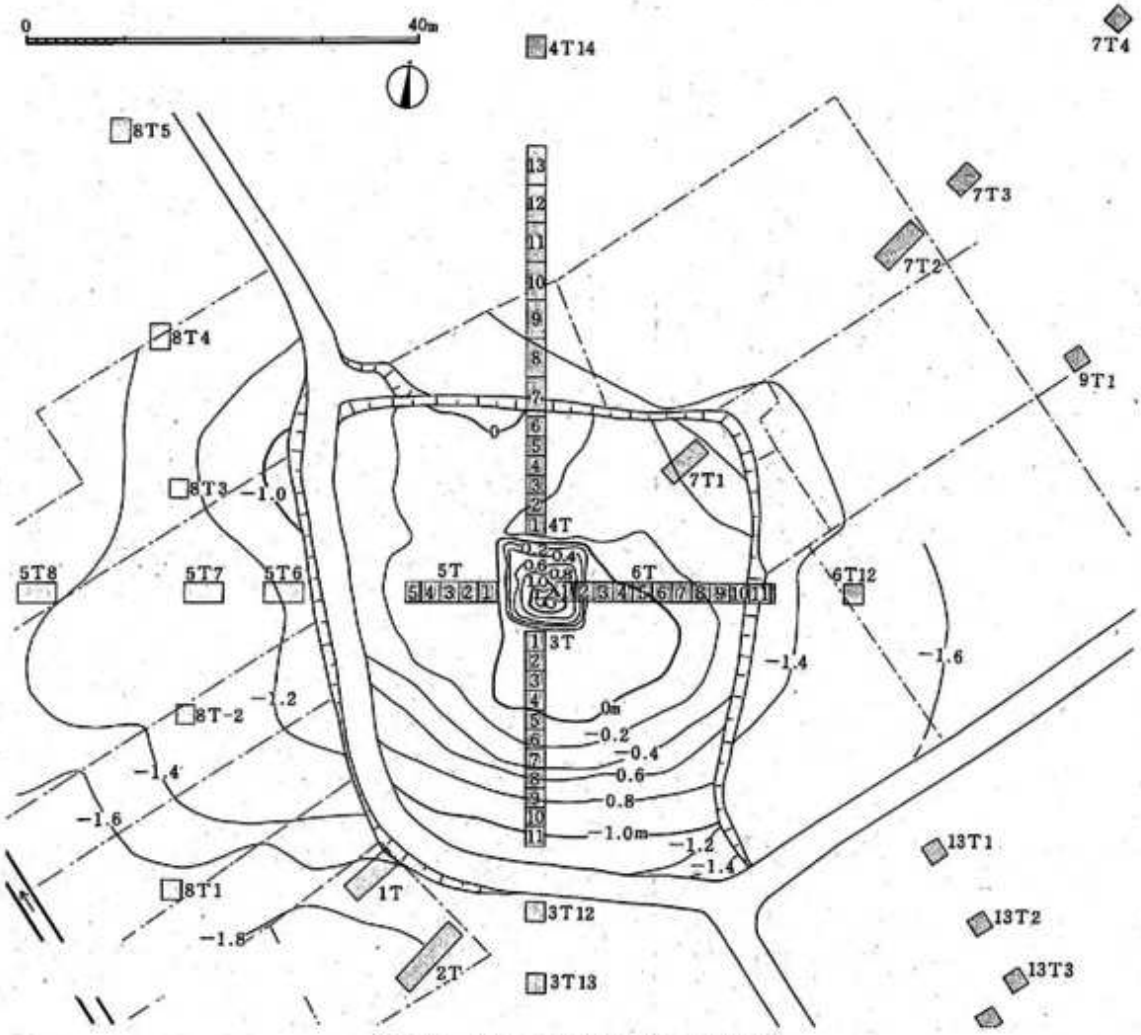
南北120mの周壕状の遺構が観察され、中世城館跡と考えられる。3．小鍛冶遺構の存在。

調査区の設定と調査の方法　開発計画は約16 haであり、遺跡として記されている約5.7 ha全域を含む。調査時の遺物散布は中央の高まった畑地に若干見られるもののその周囲には認められず、遺跡範囲として不明確なヤチ部分は踏査不能であった。なお作付は通常どおりであった。

調査は粘土の貼り土層があるとされる中心部の現地形測量をした後、三角点を基点に磁北方向で直交する第3ー第6のメイントレンチを設定し、作付等に影響しない部分を順次選び設定調査をした。また、ヤチの部分については壕址推定地を主に遺跡とされる範囲総てを対象にトレンチを設定し、ほぼ20m間隔で調査した。発掘は中心部で一部人力のみによる調査をしたほかは、重機で遺物包含層到達面まで除去した。遺跡中心部の高台以外は地盤が軟弱で、重機の走行による沈降が著しいためレベルは見込値とした。またヤチ部分では、重機の短時間による作業以外は危険で、見透しもきかないため、地表面からの計測に止めた。発掘開始は10月31日、同終了は11月20日である。



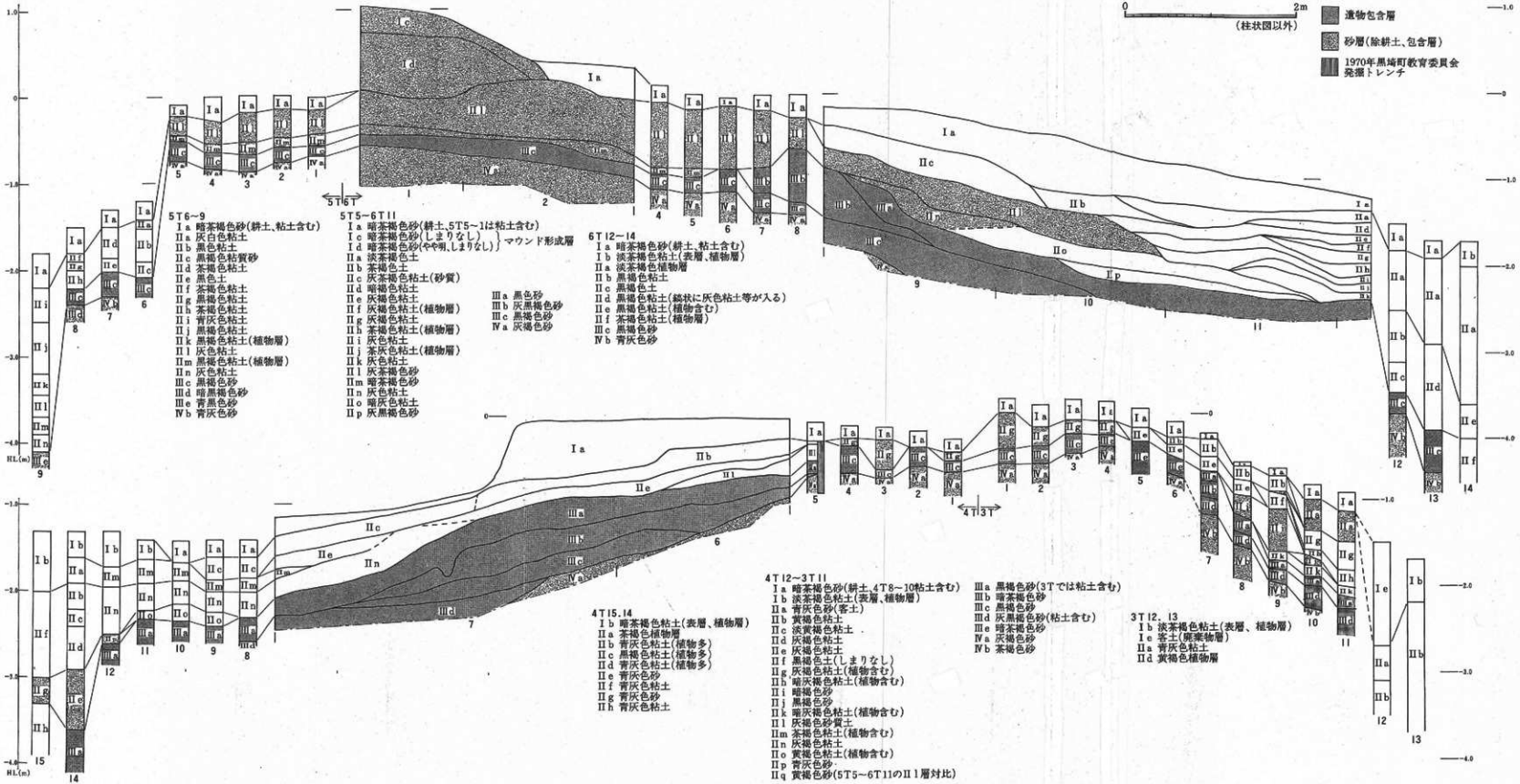
第10図　調査区の設定
（新潟市1：2500基本図を加筆修正トーレス）



第11図　遺跡中心部の現地形と調査区

層序　第12図に遺物包含層の分布する範囲を中心とする基本層序を示す。Ⅰ層表土層、Ⅱ層粘土層ないし砂層、Ⅲ層いわゆる黒砂層（遺物包含層）、Ⅳ層いわゆる白砂層を基本とする。Ⅱ層は中心の丘状部が砂層でありⅢ層に移行するが、Ⅲ層がその周囲で一旦落ち込む付近から数層に及ぶ粘土層となる。この落ち際は第３トレンチ７～11区、４トレンチ７区、6トレンチ９～11区、７トレンチ１区に認められ現地形にほぼ符合する。従前の調査で貼り粘土と記されたものは、このⅡ層の一部である。Ⅲ層は一旦落ち込んだ後緩傾斜となり、遺物包含範囲を超える付近で再び落ち込み消失するか追求困難となる。Ⅱ層は周辺へゆくに従い、腐植植物層が支配的になる。第10～14トレンチでは一部を除き、表層より２ｍ以上に及ぶ腐植植物層以外を認めず、基盤に達し得なかった。その一部は第11トレンチ12～15区で、第７トレンチ５区とともに、図示した第４トレンチ15区に類似した層序である。隣接する旧的場潟と関連するものであろうか。

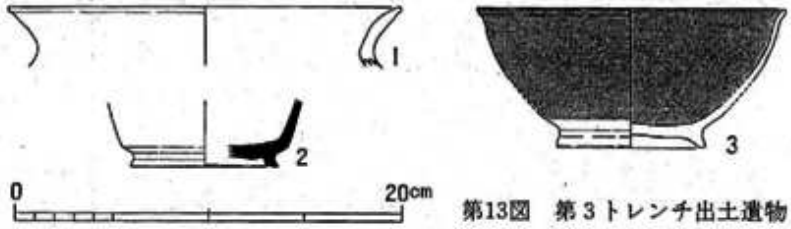
遺跡の範囲　今回の調査で遺物包含層が確認された各トレンチから想定される同層の範囲は第10図に示す約13,100㎡である。中心の丘状部は高所にあるためか、低位の包含層に比べ保存状態がやや劣るものの、全体的には優れた包含層である。この範囲以外は大半が純度の高い植物層だけで形成された湿原であり、遺物を全く出土せず、周壕の存在を想定できる層位的所見も得られない。したがって遺跡として推定される範囲は従前に記された約5.7 ha の23％にあたる約13,100㎡といえる。



第12図　土層図(第5・第6トレンチ南壁　第3・第4トレンチ東壁)　柱状図位置は各区先端部、5T6～9区　6T12～14区　4T14・15区　3T12・13区地表HLは見込値

3. 出土遺物（第13～17図、図版4・5）

出土の状態　遺物は各トレンチともⅢ層から出土した。同層が黒色砂であり、湧水も激しいため遺構を確認することはできなかった。また遺物は古式土師器と平安時代の土師器・須恵器が大半を占めるが、これらを層位的に区別することも困難であった。遺物は三角点を中心とする丘状部よりも、その落ち際に多く出土し、一段下った畑・ヤチにも良好な包含層が広がっている。土器のほかに、所属年代を確定できないが木柱根などの木製品も出土しており、遺物の保存状態も良好である。出土量はコンテナ約5箱である。縄文・中世の遺物は今回の調査では出土していない。古式土師器は甕・器台などがあるが、細片が多く復元できるものは少ない。平安時代の遺物は杯類が多く、底面は一部を除いて、須恵器が回転ヘラ切り、土師器が回転糸切りであり、ロクロ成形される。平安時代については、器形や器種から9～11世紀の年代幅があるものと考えられる。以下トレンチごとに簡単にふれる。



第13図　第3トレンチ出土遺物

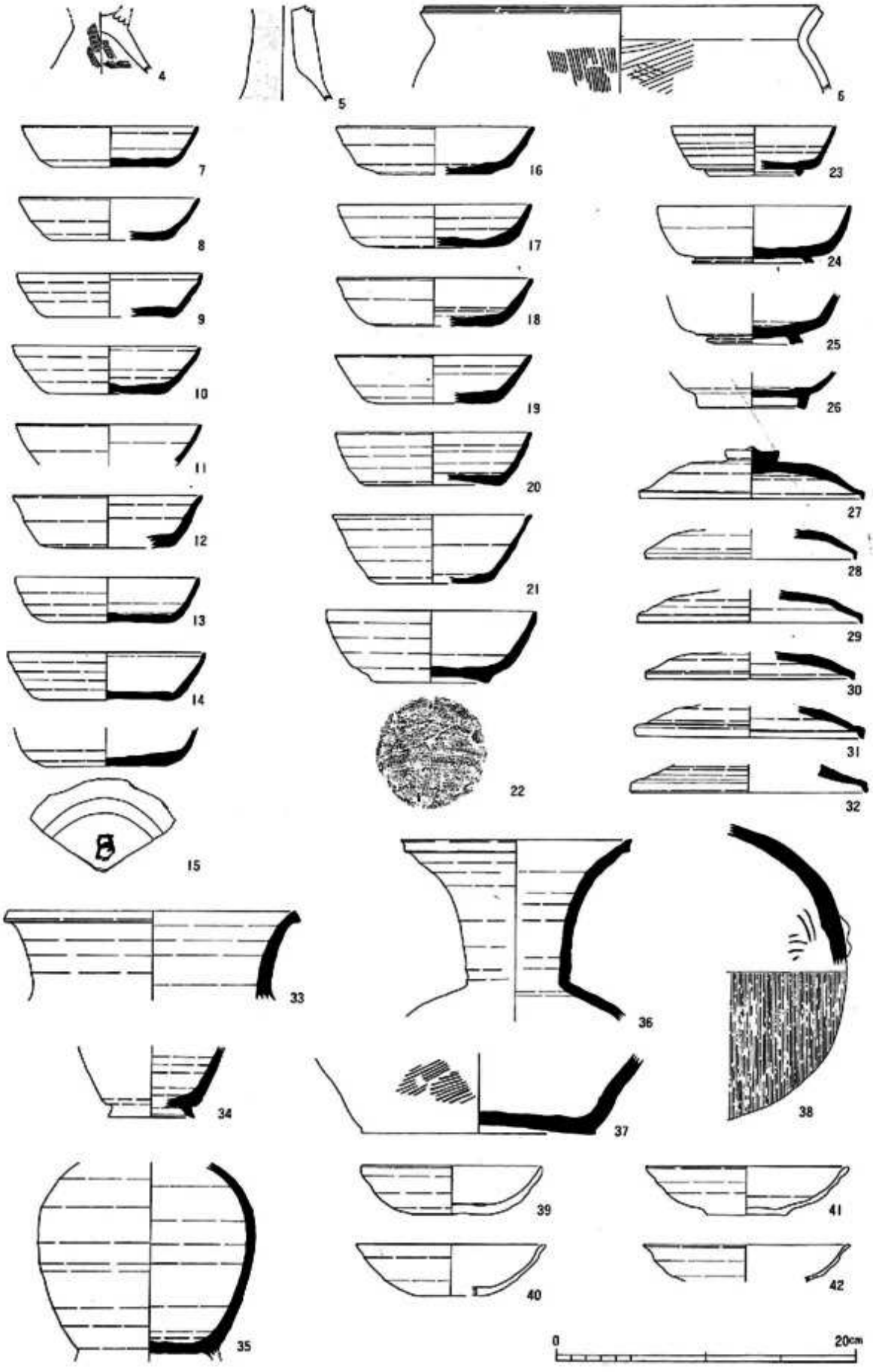
第3トレンチ（第13図）　1は古式土師器甕、2は平安期の有台杯である。3は推定口径15.8cm、器高7.6cmを測る黒色土師器椀で、高台のつく底部から丸く立ちあがり、口縁端部でやや外反する器形をとる。底面も含めてロクロナデされ、黒色処理の後にヘラミガキが加えられる。胎土は灰褐色で白色針状の物質を含む。一之口遺跡の有台椀に器形が類似し、11世紀まで下る可能性がある。(注9)

第4トレンチ（第14図・第15図）　丘状部の落ち際である7・8区から多く出土した。古式土師器は少量で、ほとんどが細片である。4・5は器台脚部、6は甕である。5の外面は丹塗りされている。

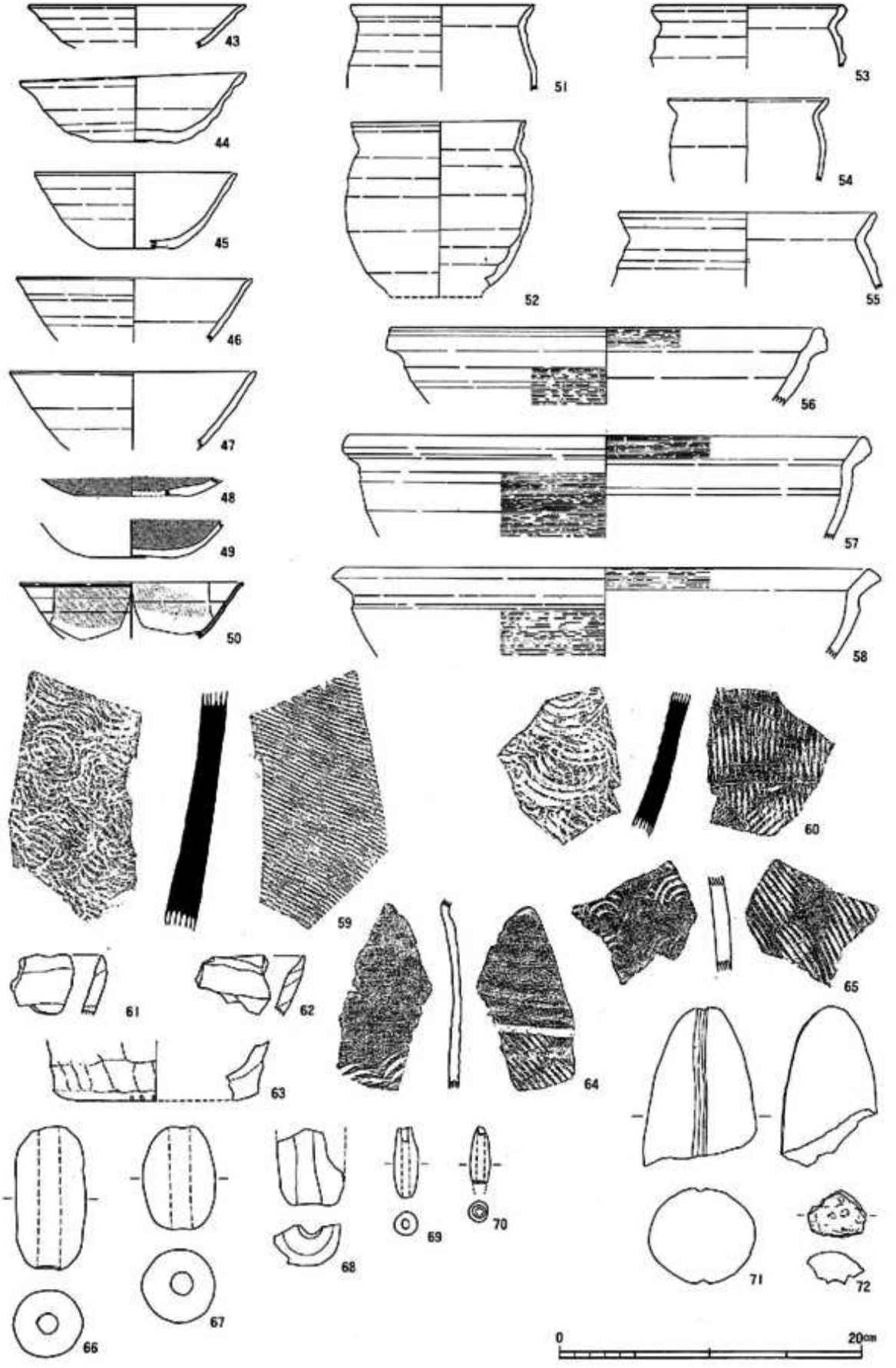
須恵器では、口径11.5～13.5cm、器高2.7～4.7cmの無台杯（7～21）が多くを占める。灰色・青灰色の色調で、焼成堅緻である。15は底面とその周りがヘラケズリされ、判読不可能な墨書がある。16・17は胴部の腰が張り、やや厚みがあるなど古い様相がうかがえる。22は推定口径14cm、器高4.8cmを測る。胴部の腰が張り口縁が直立気味の器形をとり、底面は静止糸切りである。灰白色を呈し、やや軟質の焼成である。有台杯（23～26）は身の浅いものが多く、底面は高台貼り付けの後に粗くロクロナデをする。27～32は杯蓋である。27の天井部外面は広くヘラケズリされる。須恵器甕はほとんどが胴部破片（59・60）で、口縁部は33、底部は37のみである。胴部は外面平行叩き目とカキ目、内面は同心円文のあて具痕がみられる。長頸壺（34～36）は、大小の器形がある。38は横瓶である。内面は同心円文のあて具痕がわずかに残り、外面はカキ目で自然釉がかかる。

土師器杯は口径13cm前後で身の浅いもの（39～43）、身の深いもの（45）、口径15cm前後で身の深いもの（44・46・47）がある。灰褐色で胎土に砂を多く含むものが多い。48・49は黒色土師器の杯で、内面はヘラミガキをする。小・中形の甕（51～55）の胴部はロクロナデで、底部は回転糸切りと思われる。内外面に煤が付着する。大形の甕（64・65）は破片のみで、器形の復元できるものはない。外面上半にカキ目、下半に平行叩き目、内面に同心円文のあて具痕、ハケメが施される。鍋（56～58）はいずれも胴部外面と口縁部外面にカキ目調整を施す。

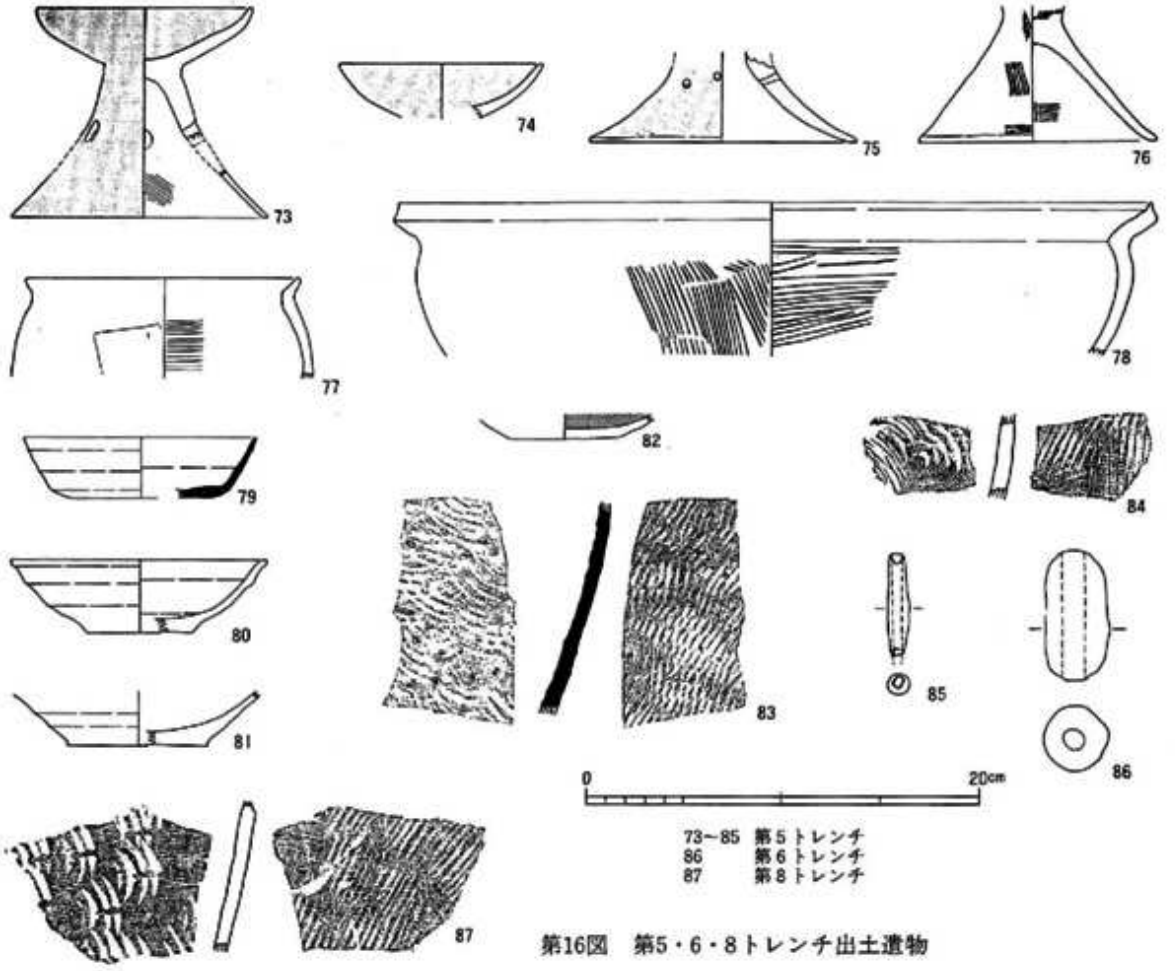
50は灰釉陶器の椀である。口縁がやや外反し先端を丸くおさめる。胴部はロクロナデで、外面下



第14図　第4トレンチ出土遺物(1)



第15図　第4トレンチ出土遺物(2)



第16図　第5・6・8トレンチ出土遺物

部にわずかにヘラケズリ痕がある。胎土は灰色である。淡緑色の釉が漬け掛けされるが、外面はほとんど剝落している。折戸53号窯式に比定され、10世紀代に位置づけられよう。(注10)

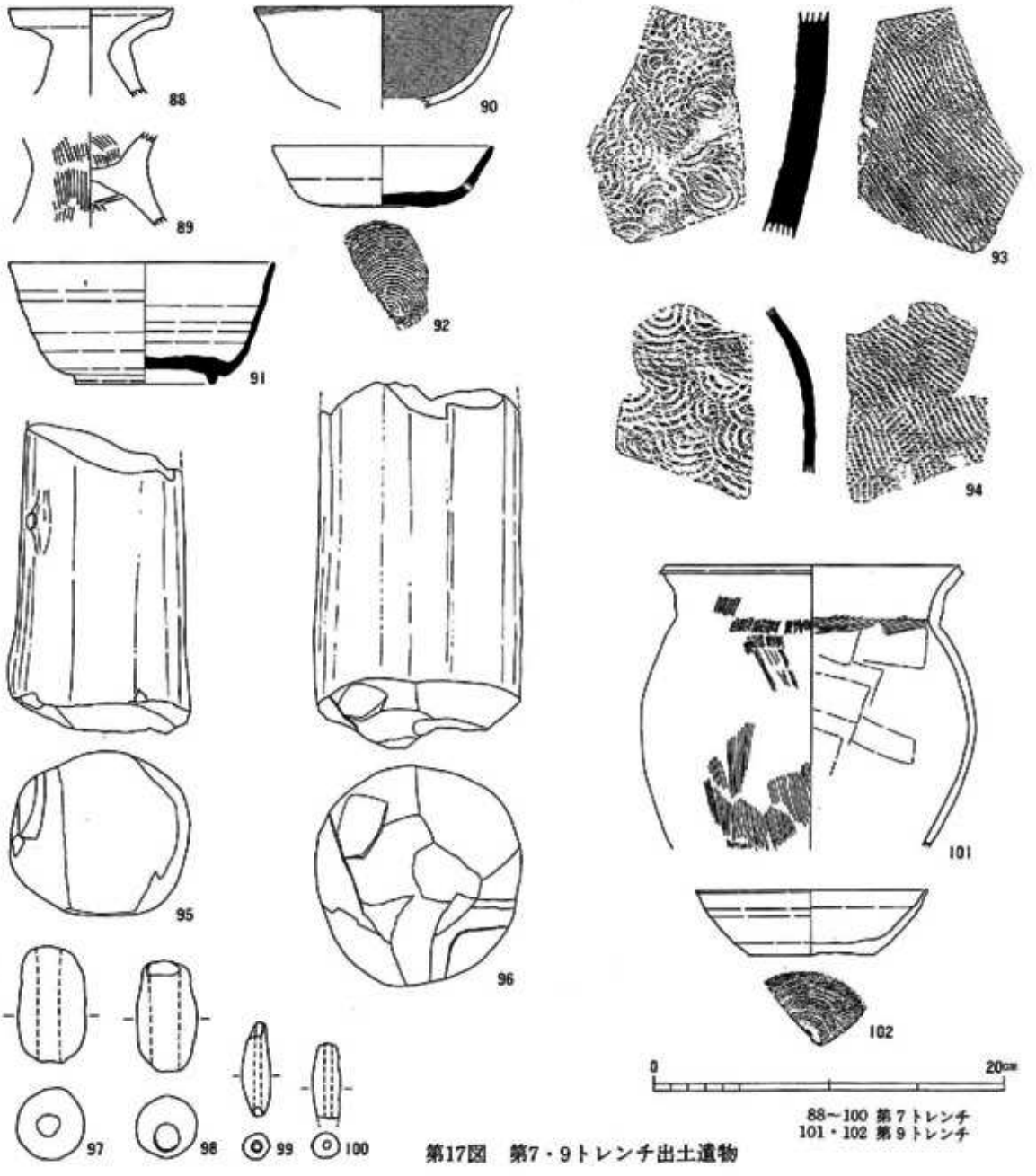
61～63は製塩土器である。外面に輪積痕を明瞭に残す。66～70は土錘、71は石錘、72は羽口である。71は中央に幅約8㎜の溝がめぐる。以上の他、端部に切断痕のある木片数点が出土した(図版4)。

第5トレンチ（第16図73～85）　古式土師器では73～76の器台、77の甕がある。73・74は外面と内面を丹塗した後、ヘラミガキを施している。73の透し孔は3単位である。75の外面にも薄く丹が残っている。古式土師器は、近くでは緒立遺跡出土資料に類例がある。(注11) この他、須恵器・土師器の杯・甕・鍋と土錘が出土している（78～85）。

第6・第8トレンチ（第16図86・87）　両トレンチとも遺物は少ない。86は土錘、87は甕である。

第7トレンチ（第17図88～100）　ヤチ内でも遺物は多く、3区では木柱根（95・96）、4区では加工痕のある木片多数（図版4）が出土している。88は内外面ともヘラミガキされる器台である。89は台付甕の脚部と思われる。厚手の作りで、内外面はハケメ調整される。淡褐色で、胎土に砂を多く含む。90は黒色土師器、91は身の深い有台杯である。92は底面回転糸切りの無台杯である。やや厚手で、淡い灰褐色を呈す。93・94は甕胴部、97～100は土錘である。

第9トレンチ（第17図101・102）　北端の3区ではⅢ層が深く落ち込んでおり、遺物は確認できなかった。101の古式土師器甕は、内面ヘラナデ、外面ハケメ調整され、外面全体に煤が付着する。102は底面回転ヘラ切りの土師器杯である。明橙色を呈し、精選された胎土である。



88～100 第7トレンチ
101・102 第9トレンチ

第17図　第7・9トレンチ出土遺物

4. ま と め

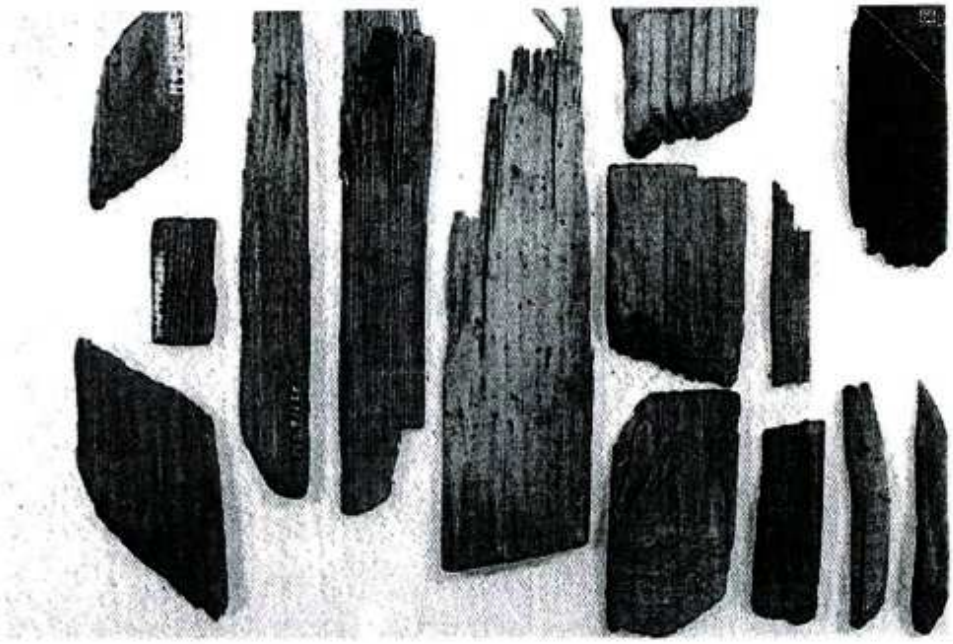
本遺跡は的場潟を北に接し、砂丘列と考えられる砂地に営まれた遺跡である。その時代は出土遺物から、古墳・平安の2つの時代が中心であったことが改めて確認された。この両時代は各トレンチで伴って出土しており、範囲は重複するものと思われる。遺物量は平安時代が7割程度を占めている。遺物の年代幅が古墳時代は短期間であるのに対し、平安時代は比較的長期であるためであろうか。また、今回は出土しなかったが、従前の調査では中世陶磁片が2点出土したほか、縄文晩期・弥生時代の資料も認められ、これらの時代にも営まれていたことが知られる。本遺跡は緒立の遺跡群と時期をほぼ同じくして展開したということが許されよう。幸い、遺跡は原野の中にあってほとんど完全に保存されており、低湿地遺跡の性格を知る上で貴重と思われる。

遺跡周辺の航空写真
1948年９月
（奈良国立文化財研究所提供）

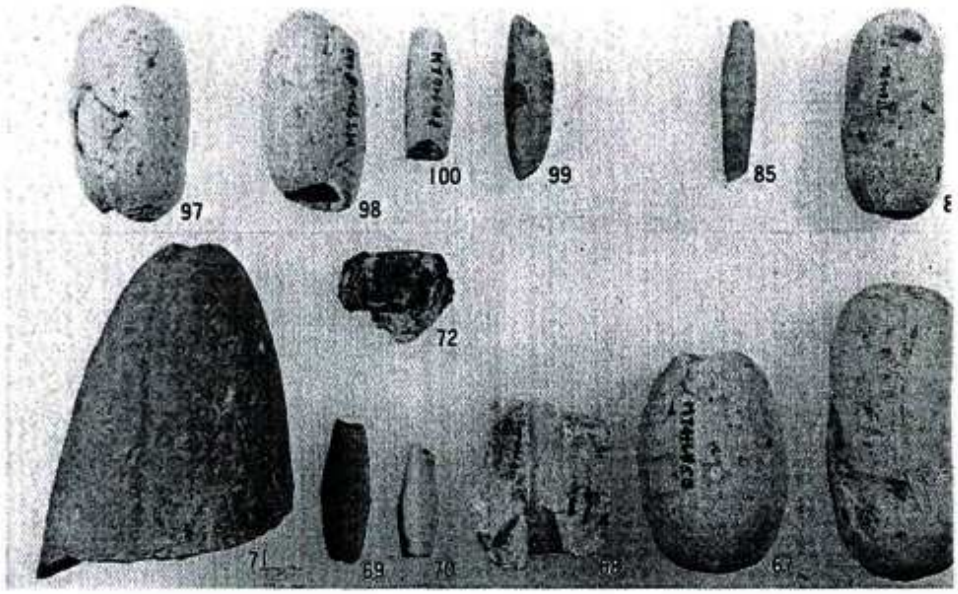
遺跡中心部景観（北から）
1986年10月

基本層序１
（第４トレンチ7・8区）

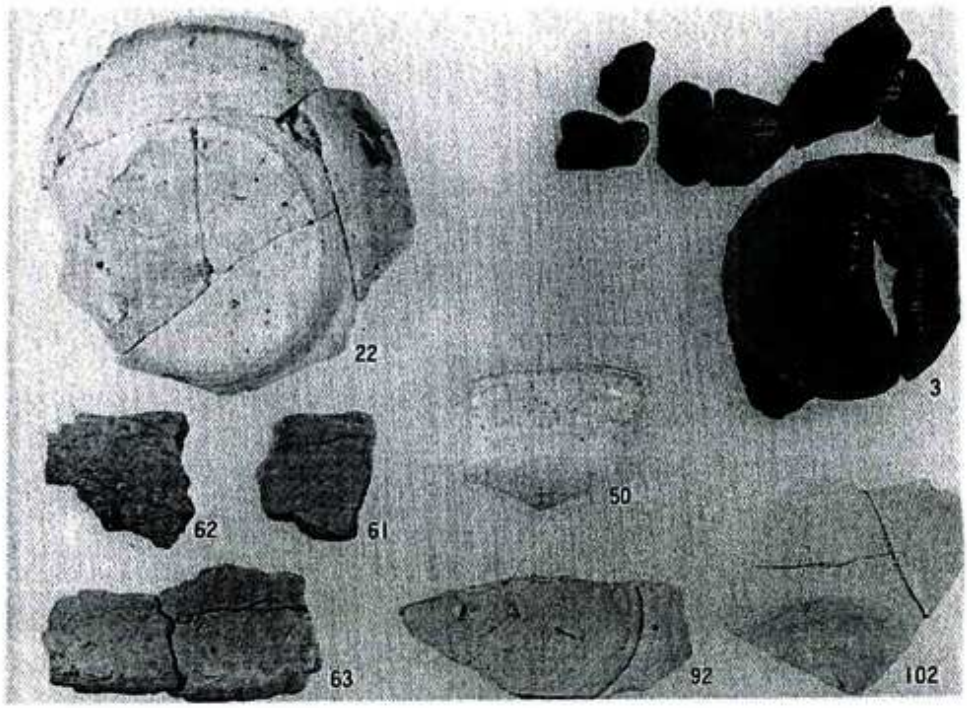
基本層序２
（第８トレンチ3区）



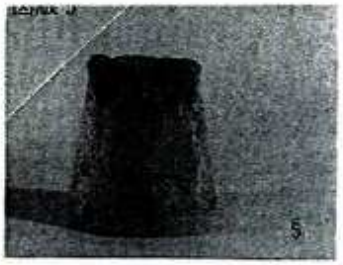
部材
左端３点第４トレンチ
左２点目第９トレンチ
他第７トレンチ

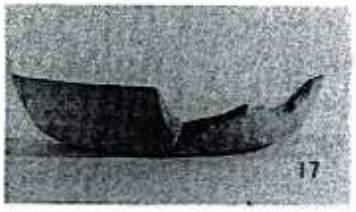


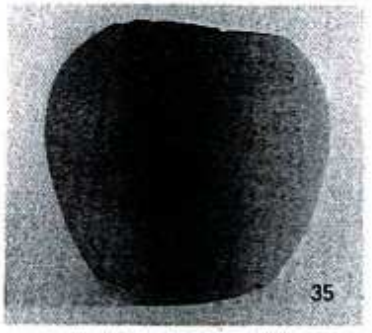
72 羽口
71 石錘
他 土錘

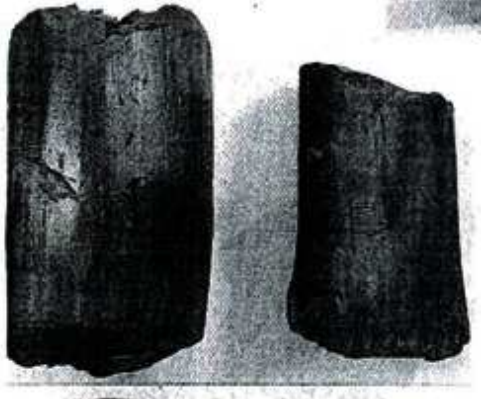


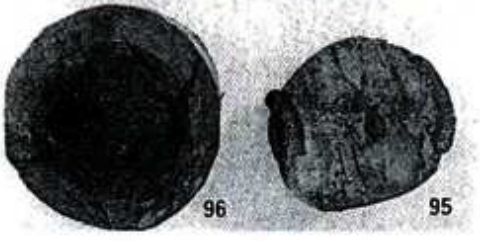
22 静止糸切須恵器
3 黒色土師器
61～63 製塩土器
50 灰釉陶器
92 回転糸切須恵器
102 回転ヘラ切土師器











稲荷神社石祠

参 考 文 献 (注)

(1) 田中久夫 「蒲原低湿地帯の微地形と表層地質」『亀田郷』新潟県教育委員会 1978年

(2) 酒井和男ほか 「亀田町周辺の遺跡調査について」『明窓』第4号 新潟東工業高校生徒会 1966年

(3) 坂井秀弥 「まとめ 1.平安時代中期の土器」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ』新潟県教育委員会 1986年

(4) 磯崎正彦編 『緒立遺跡』黒埼町教育委員会 1980年

(5) 磯崎正彦ほか 「亀ヶ岡文化の外殻圏における終末期の土器型式」『石器時代』第9号 1969年

(6) 吉田恵二編 『緒立八幡神社遺跡』 黒埼町教育委員会 1982年

(7) 『新潟郷土古文献第2集 越後村名盡 越後国黒鳥根元記』新潟市郷土史研究会 1967年

(8) 青木 宏 『新潟県的場遺跡緊急調査報告書』黒埼村教育委員会 1971年

(9) 田海義正 「(付編) 一之口遺跡4区 河川跡出土遺物」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅰ』新潟県教育委員会 1985年

(10) 前川 要 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅲ 瀬戸市歴史民俗資料館 1984年

(11) 上原甲子郎ほか 「越後緒立遺跡の古式土師器」『考古学雑誌』第52巻第3号 1968年

調 査 体 制 等

小丸山遺跡

調査主体 新潟市教育委員会 (教育長 寺崎哲夫、次長 丸山哲男)

総 括 鈴木 忠 (社会教育課長)、細川 仁 (社会教育課長補佐)

調査担当 藤塚 明 (社会教育課主事)

調 査 員 小池邦明 (社会教育課嘱託)、渡邊朋和 (同)

事 務 松岡道彦 (社会教育課主事)、古井 弘 (同)、熊谷博純 (同)

調査作業 青山彰子、阿部慶子、阿部フミ子、阿部美子、石垣敏夫、伊藤京子、浦山美穂子、大沢百合子、奥田亨子、倉茂真利子、佐藤松雄、鈴木五作、戸根富美江、豊島 一、豊島正次郎、豊島初枝、豊島兵弥、豊島ヤイ、山賀朝男、渡辺多貴美

協 力 石垣直一、新潟県住宅供給公社、新潟県教育庁文化行政課、吉沢組、直り山・西山・松山各自治会ほか

的場遺跡

調査主体 新潟市教育委員会 (教育長 寺崎哲夫、次長 丸山哲男)

総 括 鈴木 忠 (社会教育課長)、細川 仁 (社会教育課長補佐)

調査担当 藤塚 明 (社会教育課主事)

調 査 員 坂井陽一 (新潟江南高校教諭)、横山勝栄 (新潟県教育庁文化行政課文化財主事)、戸根与八郎 (同主任)、小池邦明 (社会教育課嘱託)、渡邊朋和 (同)

事 務 松岡道彦 (社会教育課主事)、古井 弘 (同)、熊谷博純 (同)

調査作業 青山彰子、岩崎直衛、浦山美穂子、荻原ノリ子、金田 博、小林正雄、高田正一、戸根富美江、西山善松、八木与二郎、山口傳七、渡辺多貴美

協 力 黒埼町教育委員会、黒埼町常民文化史料館、神社庁新潟支部、新潟県教育庁文化行政課、新潟江南高校、的場緒立土地区画整理組合設立準備委員会、緒立・尾立・亀貝・北場・黒鳥・小新各自治会、各地権者ほか

新潟市埋蔵文化財センター
000249003

新潟市小丸山遺跡・的場遺跡
範囲等確認調査報告書

発行日　1987年3月31日（非売品）
発　行　新潟市教育委員会
新潟市一番堀通町3番地12
〒951　TEL. (025)228-1000
印　刷　長谷川印刷
新潟市学校町通1番町6
〒951　TEL. (025)228-3309